

凍霜害に対する農作物の技術対策について（第2報）

令和6年5月15日
農 業 技 術 課

1 作 物

（1）水稲

- ・1～2葉期に7℃以下の低温に遭い、その後好天となった場合、急性萎凋症状（ムレ苗）が発生することがある。
- ・ムレ苗は苗立枯病菌の一つであるピシウム（Pythium 属菌）に感染している苗が低温を受けることで根の活性が低下し、その後の好天で蒸散量が急増するため葉が針状に丸まるなど急激に萎凋して、激しい場合には枯死する症状を示す。
- ・好天の場合は早朝から換気を行い、苗の焼けやムレを防止する。
- ・またムレ苗の発生を確認した際は、遮光して葉からの蒸散を抑える。
- ・田植えが可能であれば、早めに本田へ移植する。

2 果 樹

（1）全 般

- ・凍霜害の発生状況は、品目・品種・生育ステージにより異なるので、園地ごとに被害発生状況をよく確認し、着果管理を実施する。

（2）なし

- ・結実を確認して摘果作業を実施する。
- ・浮皮の程度によって残す果実を判断する。浮皮のひどいものは果実が陥没するが、程度の軽いものは被害がわからなくなる場合がある。
- ・被害が大きく、着果量が不足する場合は、着番果に関係なく果実を残す。
- ・短果枝型の品種（南水、二十世紀、サザンスイート等）で着果が見られない側枝では、徒長枝が多数発生してくるため、新梢管理をしっかり行うとともに、棚付けしてある紐をはずして先端を立ち上げる。

（3）ぶどう

- ・主芽の被害が多い場合は、主芽が脱落して副芽からの新梢が混在する。副芽は花穂が小さい場合があるので、新梢整理の際には花穂の素質を確認してから行う。
- ・副芽が多い場合はかん水を行い、副芽の伸長を促す。追肥は必要ない。
- ・副芽の利用が多い場合、開花が10日程度遅れ開花期が長引くと推測されるが、房切り等の管理は時期に合わせて行う。開花期が梅雨期にかかり、降雨が多い場合には病害発生が心配されるので、防除は2週間以上空けないように注意する。

ア 生食用ぶどう

- ・平行整枝短梢せん定栽培の場合には、花穂がなくとも各芽座に新梢を残し、葉面積確保に役立てる。房数は基準量を確保する
- ・房切りは1枝1房にこだわらず、多めに房切りしておく。

イ 醸造用ぶどう

- ・垣根仕立てでは、主幹部に陰芽からの新梢が発生する場合は欠き、結果母枝から発生する新梢の伸長を促す。

（4）かき

ア 樹体管理

- ・新梢が枯死した場合は、以後伸びてきた新梢を育成して来年度の結果枝等に利用する。
- ・被害程度の大きな園地では生育が旺盛となりやすいので、徒長枝等の間引きを行い、防除 効果を高めるとともに、樹間先端部の新梢の伸長充実を図る。
- ・追肥等を行わない。

3 野菜

(1) アスパラガス

- ・被害を受けた若茎は貯蔵養分の消費を防ぐため早めに地際から刈り取り、新芽の発生を促す。
- ・被害が軽度の場合、以後の伸長が悪く商品性の劣る若茎もあるので、経過をみながら速やかに刈取り処分を行う。

(2) スイートコーン

- ・本葉2枚程度までは、生長点が地中にあり被害は少ないが、本葉3～4枚以降の生育ステージでは生長点が地上付近にあり、生長点の壊死を起こしやすい。
- ・本葉に被害を受けた株は数日経過を見て、新葉の動きが見られなければ播き直すか、予備の苗を植え替える。

4 花き

(1) シャクヤク

- ・被害にあった花蕾は出荷できないので、早めに摘み取り病害の発生源とならないようにするとともに、株養成に回す。
- ・灰色かび病等の発生防止のため、適宜、殺菌剤を散布する。